

対象格表現の形態化

中 本 正 智

格表現のしかた

格は述語と意味的に統合して、文の意味を完結させる役割をになっている。「私が君を愛する」という表現において、述語の「愛する」だけでは完結した文とはいえない。「愛する」が具現するためには、主体の「私」と、対象の「君」がなければならない。つまり、主語と対象語があって、これらが述語と統合して文の意味を表現しているのである。

現代日本語においては、主格と対象格は形態的に明示される。

私が君を愛する。

「が」で示された語が主語であり、「を」で示された語が対象語であり、この両者が述語の中に意味的に統合され、完結した文をなす。主格と対象格にくる両語を入れかえると、

君が私を愛する。

となって、「私」と「君」の主格と対象格の立場が逆転する。この際、「私」と「君」の語形にはなんら変化がみられない。

このような考察から、現代日本語の「が」「を」は、主語や対象語と完全に形態的に独立し、格表示機能を備えた形態として発達しているとみることができる。つまり、日本語は、格の形態化が進んだ言語とみることができる。

格の形態化という点で、現代日本語と対蹠的であるのが中国語である。同じ例文を中国語でみると、

我愛你。(私が君を愛する。)

であって、格を表示する「が」「を」に相当する形態が存在しない。そして主格と対象格の立場を逆にするためには、

你愛我。(君が私を愛する。)

となって、主語と対象語の位置が入れかわるだけで、語形を変えることがない。

つまり、中国語における格の表示は、もっぱら文中の語の位置によるのであり、格機能の形態化が発達せず、主語や対象語の語形変化もないといえる。

英語の格表示をみると、日本語とも中国語とも異なっている。

I love you, (私が君を愛する。)

これからわかるように、日本語の「が」「を」に相当する格の形態化が発達していない。そして、主格と対象格の立場をかえるためには、語を入れかえて、

You love me. (君が私を愛する。)

のようにする。その際、位置をかえるだけでなく、I が meに語形を変化させていることにも注目しなければならない。ただし、Youのように、主格にあっても、対象格にあっても語形が変化しない人称語もある。

これら格表現のしかたをまとめると、

A型：位置表示：文中の位置で表示される。

B型：語形表示：語形変化で表示される。

C型：形態表示：格が形態化して表示される。

具体的な言語について格表示のしかたをみると、中国語はA型、英語はA型とB型、日本語はC型のように分類される。

格表現の可変性

ところで、言語の構造によって言語の分類を試みたものに、フンボルト Humboldtらの方法がある。その分類はつぎのようなものである。

第1は、孤立語 isolating language とよばれ、語形変化がなく、語の位置で文法機能を決定するもので、中国語などがこれに入る。

第2は、膠着語 agglutinating language とよばれ、語に文法機能を表すものが付加され、それが分解できるもので、日本語などがこれに入る。

第3は、屈折語 inflexional language とよばれ、語と文法機能を表す部分とが融合して分解できないもので、英語などがこれに入る。

さきに示した格表示のしかたは、言語の構造と深くかかわっているので、ここの分類に反映されるのは当然である。

この分類は、言語の構造という共時的な側面からの分類であり、歴史性が無視され

ている。言語の構造が歴史的に徐々に変容するものであることを考慮すると、この分類は、絶対的なものとはいえ、したがって言語間の親縁性を分ける基準にはなりえない。英語などをみると、古くは屈折語の性格が強かったが、現代では、たとえば rich が語形変化がなく、名詞にもなり、形容詞にもなる。これはちょうど中国語で、「紅」が名詞でもあり、形容詞でもあるというような孤立語の性格を帯びてきている。このことから、構造だけを見て、言語の系統を証明しようとする人たちの論の脆弱性を指摘することができる。

日本語において、格表現のしかたは不変かという、そうではない。現代語において、

ペンを持っている？

ペン持っている？

のように、格を形態化して、「を」を明示して表現することがふつうであるが、これを明示しない表現も多い。

現代日本語をみると、格が形態表示されることが比較的が多いが、古代ではかならずしもそうではなかった。「万葉集」の冒頭に出てくる雄略天皇の歌をあげると、

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘ます兒 家聞かな
告らさね

とある。「み籠持ち」「み掘串持ち」「菜摘ます兒」「家聞かな」の部分は、万葉仮名でそれぞれ「美籠母乳」「美夫君志持」「菜採須兒」「家吉閑名」と表記されていて、「を」の形態化がみられない。「み籠」「み掘串」「菜」「家」は対象語であるから、現代語で表現するとすれば、対象格を表す「を」を付加して表現すべきところである。

上代ではこのように「を」を付加しないで位置だけである格の表現が一般的であり、当時は「を」の形態化が定着していなかったといえるであろう。

つまり、古代日本語において、格の表現はC型の形態表示ではなく、中国語のようなA型の位置表示による性格が強かったことがうかがえるのである。

このことは、現代日本語において、係助詞の「は」をつけたときに、はっきりする。

水を飲んだ。

この文で、「水を」の部分に係り助詞「は」でとり出せば、

水は飲んだ。

となって格表示の形態である「を」は現れない。このように「を」が「は」の裏に隠れているように見える現象を三上章氏は「代行」と呼んでおられる。現れるべき「を」が現れずに「は」がその位置を占めているところから「代行」と呼んだのであるが、厳密には「代行」とすべきではないと考えている。

「水は飲んだ」の「水は」が、「水を飲んだ」の「水を」を代行しているとみるのであるが、通時的には「を」を形態化しない「水飲んだ」から、水を取りたてて「水は飲んだ」という表現を生んだとみるべきではないか。つまり、「を」が現れないのは、「を」が形態化する以前の古層の表現に由来しているからとすべきではないだろうか。「代行」という用語は共時的な文法機能の説明としては諒解できるが、通時的な格表現の発達を論じるときには不都合である。

日本語の対象格表現の発達をみると、古くは対象語を動詞の前に置くだけで対象格を表したのであったが、感動詞の「を」が間投助詞としてつかわれ、動作の対象の下に置いてこれを確認するようになって、しだいに対象格表現として定着し、形態化が進んでいった。

中国語は孤立語で、語形変化のない言語とされている。たしかにそうなのだが、詳細に観察すると、格表現をするのに位置表示によるA型のほかに、連体格を表現する形態化した「的」があって、このすがたはC型と認められる。例を出せば、「中国」という語を連体格にしたいとき、「的」をつけて、

中国的山。(中国の山。)

という。「的」は連体格という文法機能を示すための形態であり、日本語の「の」に近い機能をそなえている。このような中国語の「的」による格表現は、日本語のような形態表示のC型と判断される。つまり、中国語の格表現は、位置表示のA型が主流であるものの、その中に形態表示のC型を含んでいるのである。

まとめてみると、格表現は、日本語の例で示したように、歴史的に可変性をもっているものであり、したがって、中国語の例で示したように、A型とC型というように、複数の型が一言語の中に同居していることも珍しくないのである。

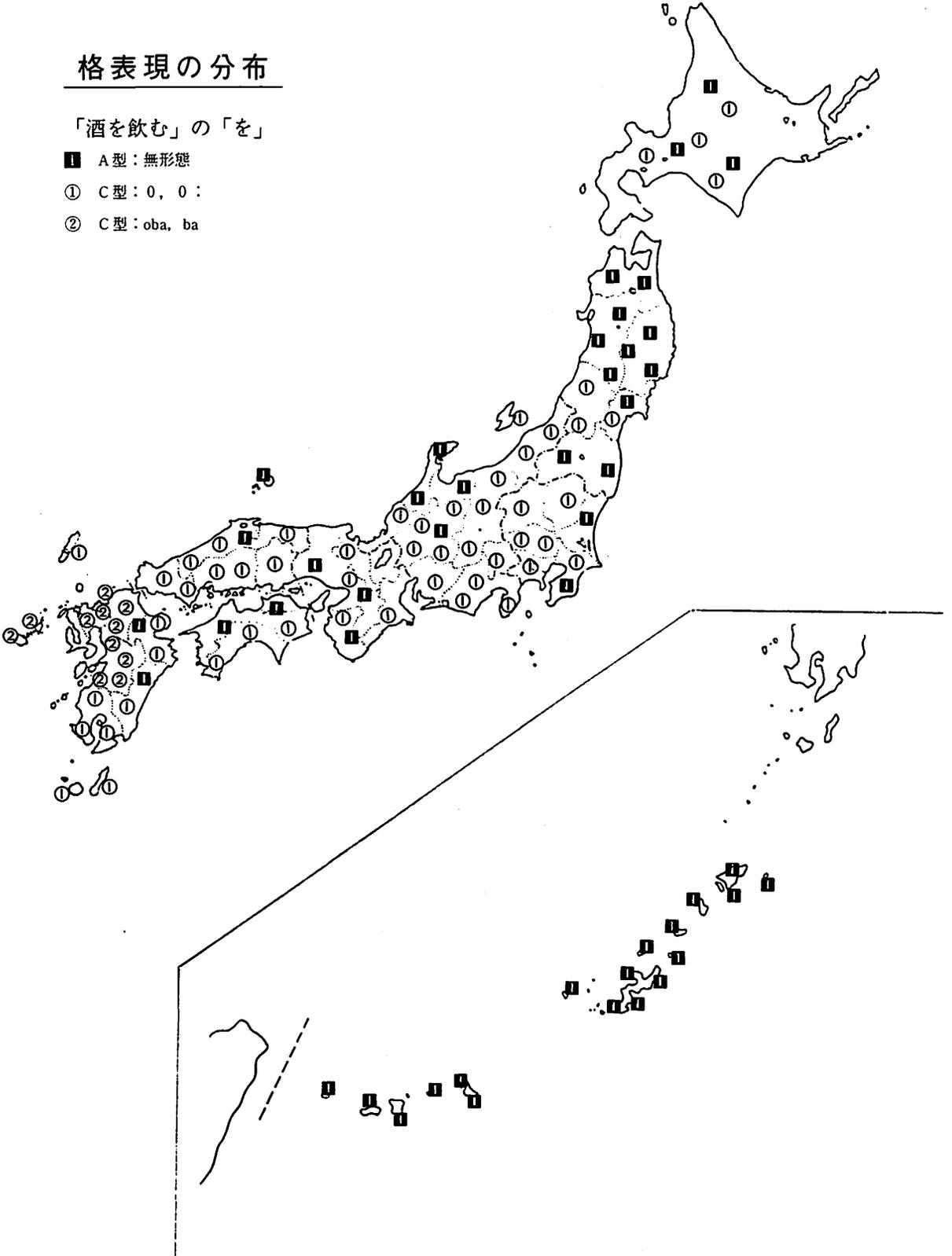
日本列島の対象格表現

対象格をどう表現するか。日本列島の各地をみることにしよう。質の高い資料として、『方言文法全国地図』（国立国語研究所）があるので、その分布を概観することにしよう。調査は「酒を飲む」の「を」の部分をどう表現するかについて行ったもの

格表現の分布

「酒を飲む」の「を」

- A型：無形態
- ① C型：0, 0:
- ② C型：oba, ba



である。その結果の概要は、

A型：「を」を形態化しないもの

C型：「を」を形態化して、①「を」というもの、②「をば」というもの。

である。その分布をみると、A型は、東北と琉球に集中している。C型は、日本列島の中間部を中心に、ほぼ全国に散らばっている。とくに、②は九州北部に分布している。

この分布から、言語分布の原理（『日本列島言語史の研究』P.38）を適用して、東北と琉球のような「を」を形態化しない表現が古層であり、「を」または「をば」と形態化するのは新しい層であるといえる。これは文献上の考察と一致している。

ところで、対象格表現の考察の結果、古代日本語において、それがA型であり、中国語のA型と近くなるのであるが、日本語では対象格を動詞の前に置くのに対して、中国語では対象格を動詞の後に置くのであって、両言語の対象格の位置には差がある。

参考文献

三上章『象は鼻が長い』くろしお出版、1960年。

国立国語研究所『方言文法全国地図』1989年。

中本正智『日本列島言語史の研究』大修館書店、1990年。

中本正智・劉麗『日本語と中国語の対照研究』学術情報、1991年